

---

# 無垢なる鬼械神の御使い

えーさく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無垢なる鬼械神の御使い

### 【Nコード】

N1178Y

### 【作者名】

えーさく

### 【あらすじ】

カリカリモフモフのメロンパンを食べていた僕は、気づいたら神々の戦いの流れ弾で死んだ。息抜き作ですので行き当たりばったりです。

## プロローグ

「つーわけで、わりい。転生させるからそれで勘弁してくれねーか？」

僕の目の前にいる青年が、片手を拝むように顔の前に持ってきてそう言った。

僕は公園でカリカリモフモフのメロンパンを某炎髪灼眼の女の子のようにモフモフ食べてたはず。なのに気づいたら目の前にはそんな感じであるーく僕に手を上げて謝るは、まさかのロリペド神。別名マスター・オブ・ネクロロリコン又は赤貧貧乏探偵又は最も新しき貧乏神兼旧神。

世界の中心というか宇宙の中心でロリコンを叫んだ男、いや漢。

正式名称　大十字　苦勞もとい九郎その人。

何でもクトウグアの弾丸の一発が大気圏を突破し、大気との摩擦熱で体積は小さくなっていったが、僕の脳天というか頭部をブチ貫き、スプラッターでミディアムなこんがり死体が出来上がったと、そうらしい。

それは幾多にして数多にして無限の次元を駆け抜けながら貴方たちは絶望と戦い続けてる存在ですものねー。

そんな事故も時としてあるかm……いやいやいやいや、ない。それはない。そんなことで死ぬなんて理不尽だ！

てかふつーに誰が信じますかこんな展開！！

「まったく、男ならその程度の事柄ぐらい受け入れる器量くらいみせんか。仕方がなかるう、現実としてこうなってしまったのだから」

「そこオーーーーー！！人の人生棒に振ってその程度で済ませるな諸悪の根元！！」

僕は叫びながら大十字九郎の相棒にして永遠の伴侶。別名古本娘ことエターナルロリータ。正式名称 アル・アジフに指差した。

「言いがかりはよせ。妾は何も悪くはない。怨むなら奴ら邪神か弾をブツ放した九郎に言え」

「そこオーーーーー！！なに自分は関係ありませんなんて顔して責任転載してくれてやがるこの古本娘エーッ！！」

九郎も叫びながらアルを指差した。

「やれやれ、か弱き乙女に寄って集って怒鳴り散らすとは、汝等それでも男か？まあ、それよりもだ。小僧、汝には嫌応なくこの世界の軸からは身を引いてもらわねばならぬ」

「それは……まあ、わからないでもなくはないですけど…」

日々邪悪と戦う多忙な2人が足を止めて接触し、転生という事柄を持ち込んだのだから、それはなにか、彼等にとっても見過ごせない理由があるのかもしれない。

アルが切り出すと、九郎は顔に申し訳なさそうに陰りを作った。

本当に、お人好しなんだ。

本物の彼の顔を見て、僕は改めて優しい神様の強さの鱗片を再認識した。

「妾等はこの世界に構成される者ではない。外の宇宙の存在だ。その戦いに巻き込まれた汝は、死ぬ運命にたく死してしまつたと同義だ。故にこのままではこの世界に綻びを生み出し、なにか起こるのか妾にも想像出来ん。ことさらに汝をこのままにしてしまえば、汝の魂は彷徨うだけだ」

「勝手にこつちが巻き込んで、そのままほつたらかすなんて後味わりいし、手前勝手の自己満足かもしんねえけど、その手前勝手な神に救われちゃあもらえないか？」

2人の話しを聞く限り、僕が自分の世界で暮らせないのはわかつた。てか死んでるなら同じか。なら転生でもなんでも、別の人生を歩くのもありなんだろう。安易な考えかもしれないけど…。

「OK、ミガッテゴッド。その申し出を受けてやるぜ」

「いきなり偉そうになったな。てかキャラが変わったし」

「やってみたかったただけですよ」

「さいですか」

「ほれ、ふざけてないで早くするぞ」

「お、おう」

「お願いしますね」

九郎とアルが並び立ち、五芒星が彼等の前に現れた。そしてその後、後に現れる魔を断つ無垢なる刃。

「デモン…ベイン……」

その巨体が僕を見下ろす。

アニメの起動時のように魔力がその体躯を巡っているのか、魔術回路が金色に輝いては消えを、足下から下から上へと繰り返していた。

「祈りの空より来たりて」

「なっ!?!」

「汝、その詩は!」

僕の呟いた詩に、九郎とアルの眼が見開かれる。

この詩は滅多に紡がれる事はない。いや、紡いではいけないのかも  
しれない。でも

「切なる叫びを胸に」

「デ、デモンベインが!」

「止める小僧!!その詩を唱うな!今すぐに止めろっ!!」

デモンベインが片膝を着き、その巨腕　手を、僕に伸ばしてきた。

アルが叫びながら僕を止めようと駆け寄ってくるが、たとえ止められても、止めちゃいけない気がする。

「我等は明日への路を開く!」

アルが僕に至る前に、デモンベインが僕を手の内に掬い上げ、目線を合わせるように手を掲げた。

「くそっ！どうしたデモンベイン！言うことを聞け！」

九郎がデモンベインを制御しようとしているらしい。でも無駄だ。

デモンベインは今自らの意思で動いて、多分僕に何かを告げようと

デモンベインの機体が金色に輝き、字袴子・アザトース・がその体から紡ぎ出される。

「汝、無垢なる翼　デモンベイン！！」

デモンベインが右手を虚空に伸ばす。その先にはマイクロブラックホール　そして何かを掴んだ腕がそれを引き出す。

其れは、燃えさかる生命の咆吼だった。

其れは、横たわる死の静寂だった。

其れは忘れ去られた神々の禁忌にして、万物の意味を嘲笑うもの。

外なる邪悪の神々を封じ込めし箱。

それは異様な物質だった。黒い結晶体　七本の支柱に支えられた、不揃いの平面で構成される多面体。鉱物でありながら脈動する生命の生々しさを感じさせるそれを中心に、奇妙な、奇怪な、不可解な剣が存在している。

「「シャイニング……トラペズヘッドロン……」」

そして僕は詠う。デモンベインは舞う。字禱子・アザトース・が廻る。

身体を字禱子・アザトース・が包み、失った命の叫びを糧に、新たな生命の産声を

今、高らかと詠みあげられる詩 世界に捧げる、生命の詩。

『荒ぶる螺旋に刻まれた神々の原罪の果ての地で

血塗れて、磨り減り、朽ち果てた聖者の路の果ての地で

我等は今、聖約を果たす 』

詩に合わせ、トラペゾヘドロンを手に、デモンベインが舞う。

祭壇の神子の如く、この詩に捧げる剣舞。

『 其れはまるで御伽噺の様に眠りをゆるりと蝕む淡き夢夜明けと共に消ゆる儚き夢

されど、その玩具の様な宝の輝きを、我等は信仰し、聖約を護る

』

詩は術式。舞は陣。

唄うごとに、舞うごとに、新たなる世界秩序を編み上げ、組み立て

る。

放たれる存在力を前に、この詩の為の世界すら歪んでゆく。

『我は光、夜道を這う旅人に灯す、命の煌めき

我は闇、重き枷となりて路を奪う死の漆黒

我は光、眸を灼く己を灼く世界を灼く熾烈と憎悪

我は闇、染まらぬ揺るがぬ迷わぬ不変と愛

愛は苦く、烈しく、我を苛む

憎しみは甘く、重く、我を蝕む

其れは善

其れは悪

其れは享受

其れは拒絶

其れは、純潔な、醜悪な、交配の儀式

結ばれるまま融け合うままに産み落とす

墮胎される、出来損ないの世界の

』

儀式は最終章へ行を移す、トラペゾヘドロンのデモンベインの魔力は限界にまで膨れ上がっている。後はこれを解き放つだけ。

『その深き昏き怨讐を胸に

その切実なる命の叫びを胸に

』

舞が止まり、トラペゾヘドロンの剣先を天へ突きつける。

そして最後の詩を紡がれる。

『埋葬の華に誓って

祝福の華に誓って

我は世界を紡ぐ者なり!』

剣先から暴力的な、激烈なまでの、熾烈なまでの、強大で、膨大な魔力、光と闇の極限が、白、黒、灰、そして混ざりながら混ざらぬ白黒の斬撃が繰り出される。

切り裂くのは空間

切り裂くのは次元

切り裂くのは時空

空間に走る亀裂、その先……

「憎悪の空より来たりて、正しき怒りを胸に！我が掌は魔を断つ剣を執る！汝、気高き刃　デモンベイン！！」

身体を包む字袴子・アザトース・が収束し、僕を光の玉に変え、デモンベインが切り開いた時空の亀裂へと、羽撃かせた。

世界への扉を開き、死した存在を新たな存在として創り出す。そんな神の如き行いを目の当たりにした旧神は、しばらく固まっていたが、亀裂が閉じ、シャイニング・トラペゾヘドロンとの消失と共に、再び動き始めた。

「いったい……なんだったんだよ……今の……」

「わからぬ。デモンベインが何故シャイニング・トラペゾヘドロンを振るつたのかも、あの小僧が何をしたかったのも、今となってはな……」

2人は確かにデモンベインの力で彼を転生させようとはした。

だがそれを、2人が思っていたものとはまったく異なるが、結果は同じ事をデモンベインはした。しかしシャイニング・トラペゾヘド

ロンまで出して大掛かりな儀式をし、切り開いた空間へ彼を飛ばした意図はなんだったのか、繰者たる2人に、デモンベインは、物言わぬ刃金の巨人は語ることはなかった。

## 第一章 身の上話

こんにちは、こんばんは、初めて、お久しぶり？

カリカリモフモフのメロンパンを食べていたら九郎ちゃんの流れ弾喰らって死んだ幸薄少年こと現大十字黒朔たいじゅうじくくです。

いえ、元々この名前とは一字一句被らない名前だったんですけど、僕の容姿が、この名を名乗らないと失礼じゃないかと思ってそう名乗っています。名字は偽名ですが……。

僕の容姿を簡単に簡潔に説明すれば、鴉の濡れ羽色のしとやかな髪の毛に黒真珠や黒曜石の様な漆黒の瞳と、日系の特徴を置いてけぼりにした白い肌。顔と体つきはとある古本娘工口娘。

そう、黒い紅朔・アナザーブラッド・だから黒朔としたのです

あ、ちなみに男だから男の娘なんです

いやあー、僕も最初はマジビビりましたとも。何せ気づいたら声に違和感ありまくるわ髪は長いわ、でも一番驚いたのは霸道財閥に拾われたことだろう。

魔人・霸道鋼造。

僕を迎入れてくれた世界の帝王。

時と場合によっては次の舞台を整える為に奔走する砕けた白き王。

何故僕を拾ってくれたのか、その理由はわからない。何せ本業は息

子の兼定に譲り、仕事に忙しい兼定とエイダに代わり、孫の瑠璃の面倒を見ているとは言えども、相も変わらず忙しい身。直接会い、言葉を交わしたのも、両手足の数より少ない。

故に僕は彼がどんな霸道鋼造なのかを知る術はない。

いくら迎入れたとはいえ、見た目年齢10の子どもに、世界の闇のその最果ての深淵たる魔術関連の事柄を見せようはずもなし。十三番閉鎖区画がどの様な理由 表向きの新型動力炉の事故か、少し裏向けの魔力炉の事故なのか、邪神ズアウィアを葬りながらもその場に滞留する瘴気故なのかも調べる術はない。

しかし、もしもの未来を予測して、出来る事は多い。

その為に、前世とは比べ物にならない質と量の勉学を、英才教育を受ける瑠璃の傍ら、コツコツやっていくしかなかった。

クロフォードさんが余計である僕の面倒も見てくれた為、地力の差で負けている瑠璃の勉強にもギリギリで食いついていった。

しかし瑠璃はまだ5歳なのに、元大学生の僕がヒーローコラ言つてやる問題を普通に解いていくんだから、何この5歳児コワイである。

霸道財閥の帝王学や経済学は、そんじょそこらのものとはわけが違い。一応ギリギリでついていける僕ですら株で一儲けしてるレベルである。

まあ、お金はあって困らないものだからいいんですけど。

そんな英才教育にひーこら言っている僕ですが、瑠璃には出来ないことをいくつかしています。

クロフォードさんに頭を下げ込み、銃や剣の扱い方に始まり、強靱な肉体を作り出す為に鍛えて貰ってもいます。

そして時々エイダの部屋に忍び込み、錬金術を基盤にした科学を自力で学んでいます。

エイダはこういうことを教えてくれないから、自分で学しかないんですよね。

デモンベインやゴリアテの整備記録だけでも、一般的な科学と錬金術を超えるオーバーテクノロジーの塊で、さらにエイダはこれを後生に託す気のように、僕みたいな専門知識に疎い人間でも読める内容なのが幸いです。

そうやって、来るべきかもしれない日を待ち構えながら、僕は自分出来ることをして日々を過ごしていた。

大十字      もとい霸道黒朔。書類上10歳の冬のことでした。

## 第一章 身の上話（後書き）

とりあえず黒朔の簡潔な立場の説明でした。

## 第二章 今の平和

空を切る音が耳を揺らす。

地を踏みしめる感覚が骨を揺らす。

握りしめた拳が、老人の胴体を挟り抜かんと突き出された。しかしそれは叶わず、視界の天地が転ずり、背中に衝撃。

「がはっ！！」

肺に溜まる空気を一瞬にして吐き出す衝撃は、一撃で戦闘能力を奪った。

「……………ツハア…ハア…ハア、ハア……………またダメか…」

背を強かに打ちつけ、一時身動きが制限された大十字黒朔は呟いた。

「ほっほっほ。この老いぼれでも霸道の執事故、まだまだ若い者には負けはしませんぞ」

好々爺のように微笑む燕尾服に身を包む霸道財閥執事、クロフォー



クロフォードの鍛練のあと、黒朔は瑠璃と遊んでいた。とは言えども、実際は瑠璃に手を引かれて走りまわっていた。

「もっつ、体力が無さ過ぎですわよ、お兄様！」

「…ちょ、そんな、こと、言われ…て、も……」

クロフォードとの鍛練直後に体力0で引つ張りまわされている黒朔にとつてはキツイことだろう。ちなみに瑠璃は黒朔の鍛練関係は知らない。まだ5歳の彼女は知らなくても良い世界なのだから。

そんな2人の子供達をテラスで霸道財閥前総帥、霸道鋼造は見守っていた。

霸道鋼造が黒朔と出逢ったのは、アリゾナの砂漠にある霸道財閥の金鉱山だった。

霸道は年に一度は其処へ赴く。

そしてその日もまた同じだった。ただ、とある祝詞を聴いた後、虚空から光に包まれた黒朔が落ちて来た以外は。

霸道は最初は黒朔をミスカトニックか息子の妻が学園長のダーレス学園に預けようとしたが、その名と容姿に運命めいた物を感じ、ミスカトニックでもダーレスでも年齢的に息子の方でもなく、自らの養子に迎えた。

産まれた瑠璃を腕に抱き、ただ一度、自らを本物の己に戻った日に

聞いた黒朔の十字架と言う名。

霸道瑠璃。 大十字黒朔。

霸道鋼造は 否、大十字九郎は、この2人の存在に救われた。

かつて、そして今も愛するただ1人の君と、かつて命を預けた相棒の面影を見る少年に。

「お祖父様あー！」

「なんだい、瑠璃？」

駆け走り寄る孫娘を抱き留める。

無邪気な孫娘をあと10と数年したらあの地獄に叩き込まねばならないのかと思うと心が痛む。何せ自分の知る限り、兼定も、エイダも、自分も、死んでいるのだから。だが、この瑠璃にはまだ救いもある。

「…ハア…若いつて、いいですねー。疲れないんですかねえ……」

息を絶え絶えにして此方に来たもう1人の息子を見る。

産まれた時から瑠璃を見守る、前回には居なかった少年。その存在のファクターが何を生むしにしろ、彼ならもしもの時、瑠璃を闇か

ら引きずり上げるだろう、かつて命を預けた相棒のように。

「お祖父様、お腹が空いてしまいました」

「おお、そうかそうか、……黒朔」

「は、はい。なんでしよう、お、お父義……様……」

「久しぶりにお前のミートパスタをご馳走になれるかい？」

「ええ！？ば、僕が作るんですかあゝ」

「お兄様のミートパスタですか！？私も食べたい！！お兄様、お願い！！」

「うっ、……しよ、しょうがないです、作るしかないですねえ。べ、別に、瑠璃のお願いに折れたわけじゃありませんからね！クロフォードさん、手伝ってくださいな」

「かしこまりました、黒朔様」

未だ宿敵、そして黒幕との決着はつかない。

だがこの平和な時間を胸に刻み、次の舞台へ赴こう。

この平和を守る為に戦おう。

斃れし白き王。されど未だ折れるには程遠い。

愛した君　孫娘と、信頼する相棒　その面影を見る息子。

その存在が、白き王を支え、その力の糧となっていた。

そして時は巡り、魔都で事件が起こる。

## 第二章 今の平和（後書き）

ちよい無理やりな黒朔と鋼造の馴れ初めでした。

### 第三章 シュヴァルツェア・ファントム

アーカムシティ七番街中央通りにあるとある店。

『シュバルツェア・ファントム』

名前は『黒い亡霊』とかなり胡散臭い。

店の外装も黒一色で、夜も眠らない魔都アーカムシティにおいても闇に紛れる不思議な店。

その店の主は12歳となった霸道もとい大十字黒朔である。

店を出した理由は特になく、強いて言えば黒朔なりの下町の情報集めである。

内装はクラシック風であり、落ち着いた雰囲気醸し出している。

メニューも万人向けで、コーヒー、紅茶、緑茶、酒があれば、デザート品や酒受け、軽食もある程度は揃えられている喫茶店風だが、一番人気はお手製ミートソースパスタまたはミートソースライスだ。

少しトマト味の濃いめのミートソースに牛肉の挽き肉とみじん切りにした玉ねぎがこれでもかと程入っていて、さらにしめじをぶち込み、具とソースの比率が6：4という具盛りなミートソースである。

ちなみにこれは黒朔が前世から作っていたミートソースだが、この世界に来て霸道家執事、クロフォードの手解きを受け、技術を向上させたことにより、具材は変わらずにも関わらず、味は霸道財閥の保証付きの一品へと昇華したミートソースとなった。

ちなみに瑠璃の好物の1つでもある。

アーカムシティの支配者の舌も唸らすそんな最高級品なミートソース料理が知らぬくとも手頃な庶民価格で食べられるとあって、店の出入りは良いと言う自負が黒朔にはあり、朝の出勤族や昼には休憩で近場のサラリーマンや近所の奥様方の井戸端会議、夕時は学生やら夜は帰宅族や夜勤族が来ては話題を広げ、黒朔は厨房にて料理をしつつそれを聞いている。

ちなみに軽食や酒受け関係を黒朔が、飲み物関係やデザートは去年末から黒朔の執事となったクロフォードが務めている。

それは霸道鋼造がウィンフィールドを新たな執事として迎入れたからだ。

確かにクロフォードは強いが、霸道鋼造よりも年を重ねていて、軽く100歳は超えているはず。それでも普通に背を真っ直ぐにして歩き、黒朔を鍛えて未だに負け無しなのだから、本物の超人かもしれない。それでも衰えは感じているとは本人談。

クロフォードはウィンフィールドを霸道家執事として鍛える傍ら、新たな主、黒朔の下でバーテンダーをしている。ちなみに最近蜂蜜酒と煮干しにハマっているらしい。

そんな少し胡散臭い名だが味は最高の喫茶店風な定食屋っぽい店は今日も朝5時から深夜0時まで営業していた。ちなみに土日は休みで、水曜日は10時開店22時閉店である。



少女の息は荒かった。このままでは出血多量で死ぬのは明白だろう。  
しかし今の彼女に頼るべき物はない。

「チツ…！」

膝が崩れ落ちる。

足からも血が出ている。

動こうと言う意思に身体が待ったをかけているのだ。最早動くことは叶わぬと。

座して死を待つ最後とは、彼女自身気に入らない最後であったが、  
今回ばかりは相手が悪すぎたと言えなかった。

遠路遙々故郷から逃げ続けて約5年。

持ち生まれた奇怪な力のお陰ですべてを失った。その力が今日この  
日まで命を繋いでいたが、結局力のせいで死ぬは同じだ。

「…お腹…空いたな…」

世辞の句としては阿呆のようだが、ここ4日程マトモに食事をして

いない彼女には、死や生よりも、目の前の欲求が死活問題だった。

|||||

今日の営業を終え、明日の仕込みをする中。黒朔はふとナニカを感じた。それは黒朔が”気”を扱うようになってから超常能力関係を知覚感知出来るようになった。

その力で霸道鋼造や兼定、エイダ、霸道邸の地下、ミスカトニツク大学方面から闇の気配を感じるように

このアーカムシティから正の気を感じると同時に深淵の狂気も薄々感じられるようになった。十三番閉鎖区画や焼野に漂う瘴気を感じた。

熾烈にして強烈にして激烈にして、邪神の残した傷跡は幾何十の時を経て未だに大地を汚していた。

閑話休題。

つまりそんな”気”を感じるようになった黒朔が感じたのは魔と死の気配だった。

別にそれ自体は珍しくもなんともない。この魔都アーカムシティは絶えず正と負の力と気配に満ちているのだから。しかしそれが店の近くとあっては放っては置けない。折角軌道に乗り始めた商売だ。

不穏な噂で客足を減らしたくはない。

「クロフォードさん、少し頼みます」

「一緒にしましょうか？」

「や、直ぐ戻りますから、平気です」

エプロンを脱ぎ、タキシードを身に纏い、帽子を被る。  
ナックル付きのオープンフィンガーグローブを嵌める。  
護身のマテバ2挺を腰のホルスターに、2本の太刀を後ろ腰に収め店の外に出る。そして裏路地へ。

魔の気配と死の気配を探して歩く。

最初に気配を感じた場所と近所の地形を照らし合わせ、大体の場所まで10m近くに来ると、鼻に血の臭いが入ってきた。

ペンライトを取り出し、慎重に歩く。

ペンライトが照らしたアスファルトが一瞬光を返した。目を凝らせばそれは血だとわかった。

「これは……女の子……ヒドい」

そこには血を流し倒れ伏す少女が居た。

片膝を着き、脈に手を当てる。

「……この子、まだ生きてる」

弱々しい脈だが、確かにまだ生きている。しかしそれも時間の問題だ。

黒朔は無線機を取り出してクロフォードに繋ぐ。

「はい。どうかありませんか、黒朔様」

「裏路地に要救助者一名発見。大至急覇道の救急車を。一刻を争います」

「かしこまりました。5分で向かわせます」

「3分をお願いします。出ないと手遅れになってしまいます」

「承知しました。3分で向かわせます」

クロフォードとの無線でやり取りしながら、黒朔はワイシャツを脱ぎ、それを裂いて止血をする。かなり血を流しているだろうが決して無意味だとは思わない。

「いったい、こんな子が何故……」

十代中盤から後半程の少女が、何者かに複数力所撃たれて血まみれになって倒れていた。

「大きな事件にならないと、いいのですけれど……」

黒朔の眩きは闇の中へ溶けていった。

### 第三章 シュヴァルツェア・ファントム(後書き)

この先が不安になってきた……

## 第四章 黒（くろ）と白（しろ）

僕が助けた女の子は今、霸道邸地下の集中治療室に収容された。

止血や気孔術で応急処置をしたからとはいえど、危険な状態には変わりはなく、一番確実に治療が保証出来るここに収容されたというわけだ。

そして対外的にここを識らない僕はここの説明をエイダに受けていた。とは言ってもシエルターと司令室と治療室以外は、つまりデモンベインと地下魔導研究所。

識っているからそう思っのか、僕はまだ蚊帳の外らしい。

「以上がここ、アーカムシティ地下施設の説明でしたけど、大丈夫でした？」

「ええ、ありがとうエイダ。もう十分ですよ」

そう僕が受け答えると、一瞬エイダは申し訳なさそうな顔をした。

「エイダ？」

「え？な、なんですか？黒朔」

「何か……いえ、なんでもありません。忘れてください」

エイダは優しいから僕に魔術関係は説明したくても語れないのだろう。そしてそれを秘密にしていることを気にしている。

お父義様に、訊くしかありませんね。場合によっては……。

「そう言えば、彼女は」

多少強引だが、話しを逸らす。

「え、ああ。彼女なら峠は越えましたよ。黒朔が的確な処置をしたお陰ですね」

「そうですね……」

助かるのなら、第一発見者としては安堵出来る。しかし仮にも覇道の人間としては安堵出来ても安心は出来ない。

「エイダ」

「……大丈夫ですよ。家族は助け合うものですもの」

「家族……か……」



髪は白銀、血と土まみれだったが故、気づけなかったらしいが、それは今綺麗に洗浄された少女の顔は、髪を排せば瓜二つ。そしてエイダが言い淀むのは、普通では有り得ない事があったからだ。

「遺伝子の酷似率は？」

「……魔力の変換伝達効率に開きはありますが、それ以外は99.89%酷似していました」

「つまり性別は違えど全くの同一人物であると言えよう。」普通”  
ならば、有り得ない」

「ええ、”普通”ならば……」

しかし2人はその”普通”以外を識っている。

「あの子を襲った者について、何かわかったことは？」

「今のところは皆目見当も、な。兼定に調べさせてはいるが、どちらにせよ、こちらから出来ることは少ない。しかし備えは必要だ。エイダ、アレらの調整を頼む。時場合によっては、使うかも知れん」

「かしこまりました。お父義様」

2人が見上げた先には巨大な鋼鉄の体躯が存在した。



「…いえ、相手がアレでは仕方がないこと、アナタが追って無理だったのならば、私以外には止められなかったでしょう。しかし、無傷ともない」

「ハッ！我が正義の鉄槌の一撃を受けましたが故、とても無傷とはいかなかった様で」

「…アーカムシティ。かつて邪神を外道を持って滅ぼし地。アレの存在を気づかれなければよろしいのですけれども……」

「御安心を、既に使いを放っております。我らの正義ある者の道、如何に邪神を退けし外道であろうともその義の前に滅して御覧に入れますよう」

「…我が義に、天の導きがあらんことを……」

#### 第四章 黒(くろ)と白(しろ) (後書き)

プロットはあるが物語を考えるのが大変だ。

感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1178y/>

---

無垢なる鬼械神の御使い

2011年11月8日02時04分発行